

レイコの部屋。

レイコ、パソコンを使って一生懸命に仕事をしている様子。

暫くして、背後からトロ子とシュウが顔を出す。

ふと気配を感じてレイコが振り返ると姿は無い。・・・というのを数回繰り返しているうちにレイコとトロ子、思いつきり目が合う。お互い驚いてフリーズ。

トロ子ゆっくりはける。

レイコ「ええ？！ちょっと…ええ？？」

慌ててパソコン閉じる。とか。

レイコ「何やってるの？！」

トロ子のはけたところまで見に行く

シュウ「うわ~~~~~！」

トロ子「きゃ~~~~~！」

シュウ、トロ子、びっくりして奇声を発し、出てきて逃げ惑う。

レイコ「うるさい、うるさいうるさい！落ち着け、落ち着け」

シュウ「(息を整えながら)ちょっと、驚かせないでよ」

レイコ「いやいや私のほうが驚いてるから！」

トロ子「シュウ！レイコ驚いたって！」

シュウ「やったね！」

シュウ・トロ「サプラーイズ！」

レイコ「サプラーイズ、じゃねえよ、セロか？」

シュウ「セロじゃねえよ！」

レイコ「やめてよ、逆ギレ。っていうか。何？何事？何で入って来てるの？」

シユウ「……」

レイコ「鍵、閉まってたよね」

シユウ「……」

トロ子「……」

レイコ「黙るな」

シユウ「会社で、レイコが席外してる間にさくつとね」

レイコ「さくつと、何？」

トロ子「さくつと、ミスターミニット」

レイコ「合鍵作ってんじゃないの！」

トロ子「サプライズ！」

レイコ「サプライズが過激すぎるよ。もはや犯罪！」

シユウ「あざーっす」

レイコ「褒めてないんだ」

トロ子「でもあそこのミスターミニット、よくあんなに早く合鍵作ってくれたね」

シユウ「ああ、あいつ元カレだからね」

トロ子「え？あのミスターミニットの店員？」

シユウ「そ」

トロ子「へえ、知らなかった」

シユウ「ミスターミニット歴20年のプロよ」

トロ子「そんなに！20年も、あんな駅の地下の小さな小部屋で人の靴やら

鍵やらを直し続けているのー！」

シユウ「そうなの。会う度に靴底の話ばーっつかり。超つまんなかった」

レイコ「お引取りください」

シユウ・トロ「うわちよつと〜」

レイコ、シュウとトロ子を追い出し鍵をかける。

レイコ「ふう」

間

シュウ、トロ子、普通に雑談しながら入ってくる。

レイコ「……………」

シュウ「だって、鍵、あるからな」

レイコ「…むかつく」

シュウ「そんな怒らなくてもいいでしょ」

レイコ「大体何しに来たの？」

シュウ「良くぞ聞いてくれました！私達、独り寂しく過ごしている女子を救う会、その菜も

ロンリーウルフ撲滅委員会です(何でもいいです)！！」

レイコ「はあ？」

シュウ「(よくわからないポーズで)花の金曜日にも関わらず、とつとと帰宅して部屋に籠っ

ている…」

トロ子「(同じくなんかポーズ)そんなレイコを…せーのー！」

シュウ・トロ「救いに気まりました！アオオオオ！」

レイコ「…大きなお世話」

シュウ「まあ、最初はみんなそう言うのよ。でもあつという間に楽しくなっちゃうから。

さあ、女子会をはじめましょう。」

レイコ「あのね、私仕事中文の。あと、女子会って言うのやめて嫌いな、その手の言葉」

シュウ「さ、飲もう」

トロ子「飲もう飲もう」

レイコ「聞け！話を！」

トロ子「レイコのために、おつまみ一杯買って来たよ。ほら。じゃーん！」

トロ子「ハイテンションで、袋から、おつまみを出す。主に豆のお菓子。

レイコ「あ、豆だ・・・！」

レイコ、豆のお菓子に興味を持つ。

シュウ「お、わかりやすく機嫌が直った」

トロ子「レイコ、豆好きだもんね〜」

レイコ「うわ〜。凄い」

レイコ、座って豆のお菓子たちを嬉しそうに眺めている

シュウ「あ、座った。これそんなに美味しいの？おばあちゃんの家でも出たこと無いよ。こんな

怪しいお菓子」

レイコ「失礼な。隠れた銘菓と言ってちょうだいよ。…あ、〇〇もあるじゃん！これどこで買

ったの？」

トロ子「成城石井」

シュウ「え？正常位石井」

レイコ「やめなさい！下品！」

シュウ「いいじゃん女子会なんだから」

レイコ「だから女子会って言わないで」

トロ子「わかったつて。じゃあ乾杯しよ！レイコも、ね？」

レイコ「じゃあ…ちょっとだけだよ？」

シュウ「オッケーオッケーちょっとだけね」

各自席について、お酒をあげ、乾杯を。一息ついたところで。

シュウ「よし。じゃあ男の話でもしますか最近どう？」

トロ子「え？私？いきなり？」

シュウ「じゃ、レイコ」

レイコ「え？私は何も無いよ」

シュウ「じゃあ私から話すね」

レイコ「話したいだけでしょ」

シユウ「違うの、私の話じゃないの。超ビックニュース」

レイコ「え？何？」

シユウ「トップシークレットだから、誰にも言わないでね」

トロ子「言わない」

シユウ「……絶対誰にも言わないでね？」

レイコ「もったいぶってないで教えてよ」

シユウ「あのね……中畑さんの話なの」

トロ子「中畑さんって中畑範子さん？うちの会社の？」

シユウ「そう。あの栃木から通ってる中畑さん。知らないメールアドレスから、最近毎日

携帯に、超エグい嫌がらせメールが届いてるんだって」

レイコ「は？何それ？」

シユウ『中畑範子、死ぬ、不倫ババア』とか書かれてるんだって！」

トロ子「え？不倫？中畑さん不倫してるの？」

シユウ「いや、本人は全く心当たりないらしいんだ」

トロ子「ええ？」

シユウ「だって中畑さんだよ。私服もダサいし。化粧も古いし、色気も無いし」

トロ子「シユウ、悪口、悪口、悪口みたいになってるから」

シユウ「あ、ごめん。違う今のは悪口じゃない。感想。感想を述べただけ」

トロ子「オッケー、セーフ」

レイコ「確かに、そういうことする風には見えないもんね……」

シユウ「そもそも、栃木の実家から毎日朝6時半の電車が出てきているんだよ。終電も夜十

時なんだよ。不倫なんかする暇ないでしょ」

トロ子「そうだよねえ。てか何でシユウはその情報知ってるの？」

シユウ「トイレで会った時にぼんやりしてたからさ、『元気ないですね』って声かけたら打ち明

けてくれて」

トロ子「さすがうちの会社の情報屋」

シユウ「まあ、女は、常に自分の話を聞いて欲しいからね。あ、後ね、ツイッターで、同一人物と思われる人から、『下らない事呟くな』とか言われてた」

トロ子「うわ。悪質。中畑さん可愛そう。…あ、うちらロン撲の出番じゃない？」

シユウ「は？何ロンボクって？」

トロ子「ロンリーウルフ撲滅委員会」

シユウ「ああ。(忘れてた)」

レイコ「いやいや、アンタがつけたんじゃないの？」

シユウ「うっかり」

トロ子「ねえ、中畑さんも呼ぼうよ」

シユウ「あ、そうだね。呼ぼう。(携帯を出す)」

レイコ「ちよいちよいちよい！家主の許可無く勝ってに決めないでよー」

トロ子「あれ？呼んじゃだめ？」

レイコ「だめっていうかさ…私あんまりしゃべったこと無いし。今日はいいでしょ。

「豆しか無いし。ほら、金曜でしょ？Mステでも見てるんじゃない？ね？また今度」

トロ子「まあ…それもそうだね」

レイコ「でも、何か怖いね、ツイッターって」

シユウ「そうなの。怖い。だからフェイスブックお勧めしといた」

レイコ「同じようなもんじゃない？」

シユウ「フェイスブックはいいよ。全然違うよ。レイコもやろうよ！」

レイコ「いや、私はそういうのやりたくない」

トロ子「あ、そうだ、シユウ。フェイスブックで繋がった中学の同級生とはどうなったの？」

シユウ「そう、その話なだけどくく(めっちゃめっちゃ嬉しそう)」

レイコ「うわ、そこに繋がるわけか(感心)」

シユウ「まあね。所詮中畑さんの話は私の恋バナに入るためのマクラね」

レイコ「アンタ人の不幸を何だと思ってるの」

トロ子「で？で？その男の子とはどうなったの？会ったんでしょ？」

シユウ「会ったし。やった」

トロ子「やっぱりー！」

レイコ「シユウのいつものことじゃん」

シユウ「だって私の予想通り、めっちゃくちや男前になってたんだよ。やっぱ私中学の時から男を見る目があったんだわ。…いや、小学生の時からだわ。光ゲンジの中で大沢みきおが一番好きだったからね」

レイコ「なにそれ？どういうこと？」

シユウ「普通小学生なら、かーくんか、あつくんでしょ？そこを大沢みきおだよ？渋い小学

生だったわけよ。あ、トロ子、光ゲンジわかる？」

トロ子「わかるよ。大沢みきおって一番おじさんの人でしょ」

シユウ「おじさんって」

レイコ「つていうか大沢みきおって自分の子供だと思ってる育ててら違ったって人だよな？」

シユウ「え？そうなの？」

トロ子「もうういいいよ、大沢みきおは。それよりその男子と付き合うの？付き合ってるの？」

シユウ「そこなんですよ、お二人」

トロ子「え？何？付き合ってるの？」

シユウ「付き合うとかそういう概念じゃないの」

トロ子「どういうこと？セフレ？」

シユウ「違うの。奴隷なの」

レイコ「は？」

シユウ「奴隷なの」

トロ子「…怖」

レイコ「私も」

シユウ「怖くないよ。それが私たちの愛の形って寸法よ」

レイコ「何が愛の形だよ。変態だよ、それ」

シユウ「まあ、聞きなよ、メスブタども」

トロ子「お。さっそく女王様口調」

シユウ「違うの違うの、何かね麻布十番で飲んでたんだけど、結構酔っちゃって。

そしたらSMに興味ある？みたいになって、で、サクっとね」

トロ子「サクっとだとお？」

シユウ「でも本当にそんな軽いノリで。麻布十番のアルファインっていうホテル知ってる？」

トロ子「知らな〜」

シユウ「あ、知らない？すっごい面白いよ。SM専用のホテルなんだけどね。部屋の名前も

『女囚の檻』とか、『奴隷市場』とか(笑いながら)おっかしいのばかりだね。(笑う)「

レイコ「(わい)わい(わい)わい(わい)わい」

トロ子「何それ？どんな部屋？」

シユウ「あ、ホームページあるよ、検索してみると、レイコのPCを触ろうとする(」

レイコ「いい！いい！やめて！汚らわしい！)と、PCを取り上げる(」

シユウ「そんなに嫌がらなくてもいいじゃん」

レイコ「…いや、何か、嫌」

シユウ「わかった、わかったって」

トロ子「で、具体的には何されたの？」

レイコ「トロ子それ聞く？」

シユウ「なんか、『シユウさま、俺を縛ってください〜』って言われて」

トロ子「まあ！彼はMなのね」

シユウ「そう。で、わかんないから、もたもたしてたら『何をしてるのだ？早く縛れこのメスブ

タ〜！』って言われて」



レイコ「彼、キヤラぶれちやつてるでしょ。SなのMなの？」

シユウ「それでも私がモタモタしてたら一回プレイ中断して『あ、ごめんね、初めてだから縛り方とかわからないよね』とか言って普通に凄く丁寧に縛り方教えてくれて、それで事なきを得たというね」

レイコ「何だそれ」

トロ子「へえ〜やつは凄いな〜シユウは。私『メスブタ』とか言われたら怖くて泣いて逃げると思っ」

シユウ「あらら。それは本当の愛じゃないわ。愛する人がして欲しいって言ってるんだもの全然苦じゃないわよ」

トロ子「愛ねえ…」

シユウ「トロ子、もしあなたの好きな秀吉君にそういう趣味があつたらどうするの？」

トロ子「ええ！どうしよう…どうしよう…」

シユウ「はい 3、2、1、ブブー！時間切れ。はい消えたく。秀吉君消えたく」

トロ子「まじかあ…ちつくしよー」

シユウ「好きな人のして欲しいことはなんでもしてあげたい。好きな人のものは全部好き。それが愛よ」

レイ・トロ「それが愛…？」

シユウ「そう。今度彼がね、私に、『セックスしながら弓道やらせたいっ』て言うからさ」

レイコ「は？何それ？どっこのこと？」

シユウ「彼が馬でえ、私が弓道の格好して彼に乗ってえ、で、弓を放つ」

レイコ「全然わかんない…」

シユウ「もう、だから、流鏑馬だよ流鏑馬。流鏑馬セックス。面白そうでしょ？」

レイコ「……」

シユウ「それでね、私来週から弓道習いに行くの」

トロ子「はあ〜！（感心）熱心だね」

シユウ「愛のための努力は惜しまない！」

レイコ「変なの。変な愛の形」

シユウ「ま、あなたたちにはまだわかんないかもね。で、トロ子は秀吉君とどうなのよ」

トロ子「え？！え…いやあ、まあ変わらず」

シユウ「順調なの？」

トロ子「順調っていうか……一応、『あなたのこと好きですよ』的なアピールはしてる」

シユウ「おおー！いいじゃんいいじゃん。どんなアピール？」

トロ子「何かね、私ってこっちの角度から写真撮ると、浅香光代に劇的に似てるんだ。(実際

に該当の役者が○○をしたら○○に似ているっていうやつが好ましいです。)

シユウ「え？マジマジ？何その情報。…あ、本当だ」

レイコ「うわ、凄い」

トロ子「でしょでしょ。だから、浅香光代風のメイクして、衣装着て、こーやって写真撮っ

て、秀吉君に『あたしやねえ、あの女絶対に許さないよ。浅香光代でございませう。』

てメールしたの」

レイコ「は？」

シユウ「何それ」

トロ子「そしたら、次の…次の…次の日くらいかな？に、メール返ってきて『トロ子面白

い！めっちゃ笑った！』って。ううううー！」

シユウ「…いや意味わかんない意味わかんない」

トロ子「え？知らないの？浅香光代さん」

シユウ「いや、そうじゃなくて。それが君の『あなたのこと好きです』アピール？」

トロ子「そう。(レイコに)ねっ」

レイコ「いや、『って言われても」

シユウ「それじゃ、ただの面白い女だよ」

トロ子「でも今までの作品の中で一番笑ってくれたよ」

レイコ「作品って、そんなに色々送ってたんだ」

トロ子「ガラスの仮面の月影先生もやったんだけど、秀吉君ガラスの仮面読んでなかったから知らないって。凄く似てただけだね」

シユウ「も〜。色気出して行かないや、色気〜。せめてナース服とかチャイナドレスとか」

トロ子「色気ねえ…。でもいいんだ。私が変わることしたら、秀吉君が笑ってくれてるんだか

ら。今はそれでいいかなあ〜って」

シユウ「何か、片思いの癖にのろけてるなあ。つまらん!」

トロ子「つまらんって、ちよと」

シユウ「私の話に比べてパンチの弱さよ。貴様には一番身分の低い豆をやるう」

シユウ、トロ子にキャラメルコーンに入ってるゴミみたいなピーナツを食べさせる。

レイコ「ちよと、キャラメルコーンのピーナツは別に身分低くないでしょ。美味しいでしょ」

シユウ「わざわざ開けたてのキャラメルコーン漁ってのピーナツから最初に食べるのは世界中

でアンタくらいだよ。はいじゃあ次は、そんなレイコちゃん。恋バナ言えや」

レイコ「は？私？…別にないけど」

トロ子「(ため息)レイコそういう話、ホントしないよね」

シユウ「確かに。てか自分の話しないよね、大丈夫？人生楽しい？生きてる意味ある？」

レイコ「言いすぎ言い過ぎ、失礼すぎる」

シユウ「だって、この頓馬なトロ子でさえ頑張ってるんだよ」

トロ子「そうだよ、この頓馬な私でさえ頑張ってるんだよ」

レイコ「トロ子、友達に頓馬ってガチで言われたら怒っていいんだよ」

トロ子「いいよ、私頓馬だし。ね？」(シユウに「

シユウ「ね。(トロ子に「

レイコ「あんたたちどういう関係だよ」

トロ子「私はレイコも、シユウも大好きだし、尊敬してるの」

レイコ「え？何…突然」

トロ子「シユウは、恋でも仕事でも、臆せずなんでもどんどんチャレンジするし、レイコはいつ

も冷静に、仕事バリバリこなしてみんなに信頼されてるし、私は好きな人の前で

おどけるしか出来ないし。仕事もフツーよりちよつと出来ないくらいだし」

レイコ「トロ子…」

シユウ「…てか何の話だっけ？」

レイ子「シユウ、せつかく今トロ子がいい話風の…」

シユウ「そういうの恥ずかしいし。あ、そうだ、レイコの話だよ。レイコ！こら、

何話をそらして」

レイコ「私のせいじゃないでしょ」

トロ子「で、いい加減教えてよ友達でしょ？」

レイコ「やだよ」

シユウ「やだよってことは、何かしらはあるってことだよね？」

レイコ「無いよ」

シユウ「いや、あるね。これは絶対あるパターンだね。教えてよ」

レイコ「やだよ」

シユウ「ちっ(舌打ち)」

トロ子「シユウ、やつぱら本当に何も無いんだよ。だってレイコ仕事ばかりしてるじゃん」

シユウ「本当に仕事好きだもんね。やってみたらいいんだよ、ツイッターとかフェイスブック

かゝ何かそういうやつ」

レイコ「やだよ」

シユウ「も〜。恋バナしようよ〜。女子会なんだから〜。秘密話そうよ〜。豆ばつか

食たべてないでさ〜」

レイコ「無いもん。しょうがないでしょ」

シユウ「も〜意地悪！(と言つて、チューハイを飲み干し、おかわりをしようと冷蔵庫の

ほう(へ)あれ、もうお酒ないじゃん」

トロ子「私も無くなっちゃった」

レイコ「買ってきたら」

シユウ「めんどくさい」

トロ子「めんどくさい」

レイコ「よし、じゃあ帰りなよ」

シユウ「やだ。買出しじゃんけんしよ」

トロ子「はいよ」

じゃんけんの体勢になり、無言の威圧でレイコを待つシユウとトロ子

レイコ「は？私も？！私まだお酒あるもん」

トロ子「とう！（などと言ってレイコを押さえつけ、残りのお酒も飲み干す）」

レイコ「おっ……」

シユウ「ほーら、無くなった。さ、じゃんけんしよ」

レイコ「もう何しに来たのあんたたち」

なんやかんやでじゃんけんをする三人。レイコが負けてしまう。

トロ子「やった〜！」

レイコ「うわ。マジ」

シユウ「マジマジマジ。さっさとしゃー」

トロ子「あ、ついでに雪見だいふくも買ってきて」

レイコ「は？パシリかよ。あんた達最悪」

シユウ「早く早く〜！さっさと〜！」

レイコ、渋々出て行く。

シユウ「レイコって本当にじゃんけん弱いよね〜」

トロ子「強そうなのにね」

沈黙(豆食ってる)

シユウ「ね、やっぱりさ、中畑さん呼ばない？」

トロ子「え？(ニコ)に？」

シユウ「サプライズ第2弾」

トロ子「あはー！いいねー！」

シユウ「ちょっとメールしてみるわ。…(メール打ちながら)来てくれるかなあ〜」

トロ子「来てくれたらいいね。いきなりさ、ピンポンとか言って！あは！(テンションあが

る)」

シユウ「トロ子、上がり過ぎ上がり過ぎ」

トロ子「あ、ごめんごめんごめん」

シユウ「朝まで飲んでるからこれたら来て〜って地図もつけて送っちゃったほうがいいよね。

「(こそメールしてたらレイコにすぐ)何やってんの？」って怪しまれるから」

トロ子「あ、そうだね。レイコ鋭いんだよ。良く見てるんだよね〜周りのこと」

シユウ「草食動物の視野だからね。レイコは。クールぶってるけど本当は寂しがり屋

なんだよ。だから人のこといっぱい見てるんだよ」

トロ子「へえ〜。なるほどね〜」

シユウ「よし、送った。……てか、来るわけないか」

トロ子「え？」

シユウ「栃木だもん」

トロ子「ああ」

トロ子「…ね、さっきの件なんだけども」

シユウ「何？さっきの件って」

トロ子「いや、その…奴隷？」

シユウ「ああ。奴隷がどうかしたの？」

トロ子「実はまた気になっちゃって…」

シユウ「何が？」

トロ子「さっき言つたホテル？」

シユウ「アルファイン？」

トロ子「そう、それぞれ。どんな部屋なの？」

シユウ「なんだそんな」とー！」

トロ子「や、なんかレイコ嫌がつてたからさ」

シユウ「レイコはクソ真面目すぎるんだよ」

トロ子「かもね」

シユ「ちよつとだけ見てみる HP」

トロ子「うん！」

シユウ「そんじゃちよつと PC を拝借…」

シユウ、レイコの PC を開く。

シユウ「あれ？」

トロ子「何？」

シユウ「これ、ツイッター？」

トロ子「レイコが呟いてるみたいだね」

シユウ「なんだ、レイコやつてたんだ。何秘密にしてんだよつて話…」

トロ子「てかさ…」

シユウ「……」

トロ子「これ、本当にレイコが呟いてるんだよね…」

シユウ「多分…」

トロ子『ブス。不倫女。良く平気で普通に生活してるな。』

シユウ「……え？レイコ……」

トロ子「……なんで？これ、中畑さ…」

シユウ「見なかったことにしよう」

トロ子「え？」

シュウ「見なかったことにしよう」

トロ子「え？」

シュウ「いいから、とりあえず」

そこへレイコが帰ってくる。慌てて、パソコンを閉じて、パソコンを元の場所に戻す二人。

不自然に立っててもいいかも。

レイコ「ただいま〜」

シュウ・トロ「おかえり〜」

レイコ「ほら、買ってきたよ。お酒と雪見だいふく…」

沈黙

レイコ、パソコンの前に行く。

レイコ「見たんだ」

シュウ「…何が？」

レイコ「パソコン」

シュウ「え？？てないよ。何で？？」

レイコ「豆」

トロ子「豆？？」

レイコ「(。パソコンを開き、豆を取り出し(豆、挟まっている。」「

トロ子「あ…」

シュウ「(悔しそうに(豆っ!」

トロ子「あ、あの…レイコ、違うの。私が…」

レイコ「許せない」

トロ子「レイコ(めん…」

レイコ「許せない…だって、私見たんだよ、中畑さん、あいつと一緒にさあ…」

トロ子「え？？」



シユウ「あいつって誰？」

レイコ「中畑さん、あいつと一緒に…あいつと一緒に渋谷の鳥貴族に行ったんだよ！」

シユウ「…は？」

レイコ「私だって誘われたっつーの。でも行かなかったっつーの遠慮したっつーの！」

シユウ「ちよっと、レイコ？」

レイコ「それなのに、中畑さんは鳥貴族行って、出てきて、ありえないことに一緒に

タクシーに乗ったんだよ！」

シユウ「レイコ、何言ってるの？」

レイコ「あいつ結婚してるんだよ。それなのにさ。凶々しい女でしょ。汚らわしいでしょ」

シユウ「ねえ、あいつって誰？」

レイコ「…」

シユウ「え？誰？うちの会社の人？うちの会社の人ってことだよ？鳥貴族に行く人…

みんな行くなあ。誰だ？」

トロ子「誰でもいいじゃん。レイコが好きな人だよ」

レイコ「好きとかじゃねえし！」

トロ子「え？」

シユウ「この期に及んで照れてる？」

レイコ「これは、正義なの！中畑範子は悪いことしてるんだから天罰与えなきゃ！」

シユウ「でも鳥貴族でしょ？それにタクシーくらい一緒に乗ることあるでしょ？」

それくらいで…」

レイコ「違うの、絶対そうなの、絶対絶対ぜったい不倫してるの！絶対不倫してる

の！鳥貴族は、不倫なの！不倫がばれたらあいつ会社にも居られなくなるし、離婚と

かになつちやつて一人ぼっちになつちやつて、とにかく取り返しつかないことになってか

らじゃ遅いの！だから私が守っているの！」

シユウ「…レイコ…」

レイコ「こっそり守るくらいいいでしょ」

沈黙

レイコ「帰りなよ、二人とも」

沈黙

トロ子「…あの、何か、気持ちわかるかも」

レイコ「はあ？へんな同情しないでよ」

トロ子「同情とかじゃなくて、何か嬉しいっていうか」

レイコ「は？何が？」

トロ子「いや…何か、レイコも普通に女の子なんだなって」

レイコ「バカにしてるの？」

トロ子「あ、いや、ごめん。そうじゃなくて…なんていうか……」

シュウ「みんな同じで嬉しいってことでしょ」

レイコ「は？アンタたち変態と一緒にしないでよ」

シュウ「一緒にするよ。一緒だもん」

レイコ「何が？」

シュウ「愛が…かなあ…？」

レイコ「？」

シュウ「好きな人は笑わせたいし、喜ばせてあげたいし、守りたいもん」

トロ子「うちら、変かな…」

シュウ「ちよつと極端なだけだよ」

トロ子「そつか…」

レイコ「あんたたち、バカじゃないの？」

シュウ「レイコもバカだよ」

レイコ「……」

シュウ「えい！（レイコに向かって豆を投げる）」

レイコ「痛。何すんの!？」

シユウ「豆まき」

トロ子「いいね」

レイコ「は？全然節分の季節じゃないんですけど」

トロ子「鬼は外」

トロ子、シユウに豆を一個、剛速球でぶつける。

シユウ「痛！ちよつと、全力のオーバースローやめろ！」

トロ子「これくらいで痛がつてたら、SMできないうよ」

シユウ「何を〜トロ子の癖に！」

豆を投げあうトロ子、シユウ。

シユウ「ほら、レイコ、あんたも、特訓だよ！好きな人に変な女が寄り付かないように守るに

は、これくらいの痛み！」

レイコ「ちよつとやめてよ！（豆を投げ返す）」

三人で豆を投げあい、じやれだす

チャイムが鳴る。

レイコ「ん？誰だろ？」

チャイムが鳴る。

トロ子「誰か、ピザ頼んだっけ？」

シユウ「あやぶ。本当に来ちゃった…かも」

レイコ「へっ」

シユウ「中畑さん」

レイコ「ええ!!何で？何で？やだ、やだやだやだ!!」

シユウ「ごめん。だつてこんなこと知らなかったし。さつき悪ノリで…」

レイコ「なんで？何そのノリ！てかなんで来るの？」

トロ子「どろろしよぶっ…」

シュウ「やっつけよう」

レイコ「は？！」

シュウ「1、2、3でドア開けて。一気に豆で攻める！豆で殺す！」

トロ子「オッケー！殺したらどうする？」

シュウ「埋める。豆で埋める」

トロ子「了解」

レイコ「やめてよ、そういうんじゃないから！」

シュウ「いって！うちら、友達じゃん！」

レイコ「友達…」

シュウ「そう、友達」

トロ子「シュウ、レイコ、早く！」

シュウ「オッケー！いくよっ！ 1…2の…3…！！！！」

暗転

「豆がざーっと落ちるざざきき音

おしま。